

人間文化コミュニケーション



展覧 2022



人文知コミュニケーターとは

人文知コミュニケーターは、社会とのコミュニケーションを通じて、研究成果を適時適切にわかりやすく発信し、同時にそこから研究課題を発見し研究を活性化する新しいタイプの研究者です。人間文化研究機構人間文化研究創発センターが人文系の新たなキャリアパスとして開拓しています。

人文知コミュニケーターは、人間文化研究機構の各機関に配置され、学術資源情報の発信、広報、社会連携活動等を推進すると同時に、自身の研究も発展、深化させるよう取り組んでいます。配置機関の受入教員から指導や助言を受けながら活動しており、人文知コミュニケーター間の自発的な研究会、独自の発信等も活発に行われています。



▲人文知コミュニケーターウェブサイト (<https://www.nihui.jp/ja/training/jinbunchi>)

人間文化研究機構とは

人間文化研究機構は、人間文化研究に関わる6つの大学共同利用機関*すなわち国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館によって構成される大学共同利用機関法人です。文理を含む300名を超える国内最大級の研究者集団として、人間文化研究を推進しています。

また、人間文化研究機構本部に設置した人間文化研究創発センターでは、人文知コミュニケーターを養成して研究と社会の連携強化をはかり、各界の著名人（経済・文学・美術・自然科学・マスコミ等）によって設立された「人文知応援フォーラム」などとも連携して、人文学のプレゼンス向上に力を入れています。

*全国の大学の関連研究者（研究者コミュニティ）のニーズに応え、また、広く海外の研究者とも連携を図りながら、学術研究を推進する中核的研究拠点。

人文知コミュニケータースキルアッププログラム

人間文化研究創発センターでは、人文知コミュニケーターを養成するために、様々なスキルアッププログラムを行っています。各プログラムでは、人文知コミュニケーターとして求められる3つのスキルを身に付けることを目指しています。

◆ 歴博・民博での研修

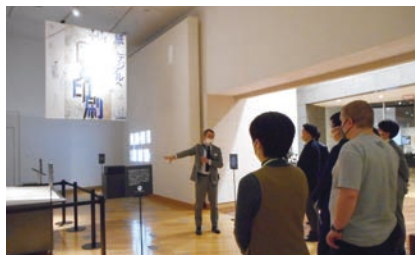
展示場やバックヤードの見学を通して、研究成果を展示する際の工夫や、展示から得た反応を研究現場に還元し、研究の高度化につなげている実例を学びます。



▲ 歴博での展示に関するディスカッション

◆ 印刷博物館での研修

凸版印刷と連携し、印刷博物館での研修を行っています。産業博物館の広報活動や地域連携活動、ブランディングについて、理解を深める機会となっています。



▲ 印刷博物館での展示場見学

◆ 筑波大学・国立科学博物館との連携講座

2018年度から、筑波大学・国立科学博物館と共同で開発した授業科目「人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える」を実施しています。人文知コミュニケーターは実際に講師として講座を企画し、大学の教育力強化に貢献しています。



▲ 連携講座「人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える」

◆ 人文知コミュニケーション研究会

人文機構基金*を活用し、外部機関の見学や研修プログラム等への参加を通して、人文知コミュニケーションの理解を深めています。

*人間とその文化を総合的に探究する人文学の発展に関心をお寄せくださる皆様に、人間文化研究機構及び機構を構成する6つの大学共同利用機関の諸活動にご寄附を通じてご参加いただくため設けた基金です。



▲ 福岡市博物館
「驚異と怪異 想像界の生きものたち」の
展示見学

情報収集
・ 分析力

「あつめる」
スキル

伝達力
・ 活用力

「ひろめる」
スキル

共創力

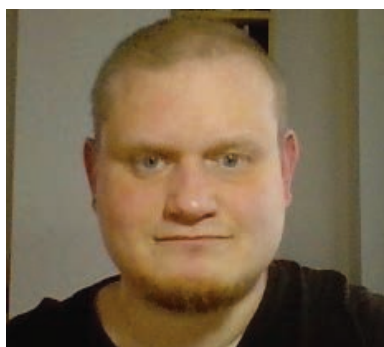
「ひらく」
スキル



▲ 「人文機構基金」について
(<https://www.nihu.jp/ja/about/donation/link>)

アルト ヨアヒム Alt Joachim

〈国立歴史民俗博物館〉



専門分野、現在の研究テーマについて

学部および大学院では国際文化学および国際広報メディアを専攻していました。研究の内容は「日本の社会×文化」をテーマとした「日本学」であり、人文学分野の横断的な研究を行っています。

今までの研究では、日本アニメにおける第二次世界大戦の表象、そしてその表象と日本社会にある戦争についての「集合的記憶」を調べてきました。これは、アニメ作品では日本は「被害者」として描かれているという国内外に少数の「代表作品」のもとで挙げられている批判についての事実確認をミッションにした研究です。

しかし、今はスポーツについての考え方の変化とそれに関するアニメでのスポーツの描き方をテーマにした研究プロジェクトもあります。

人文知コミュニケーターを志望した理由

歴博における人文知コミュニケーターの役割として、歴博の様々な資料の英訳や海外の研究機関とのコミュニケーションがあります。コロナの影響で外国人観光客や留学生が大幅に減少しました。私はこの仕事を通じて日本の「再国際化」にも貢献できるのではないかと考え、志望しました。

研究者として得た経験

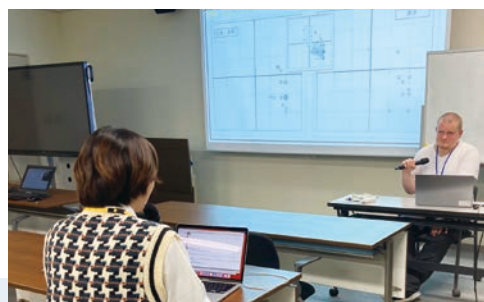
異文化間のコミュニケーションに限らず、相手に自分の表現を理解してもらい、自分の世界観を共有できる保証はありません。そのため、我々は改めて、説明が少し長くなってもいいような、ゆっくりとした交流のための時間を見つけないかなと思います。この実現に向けた取組の1つとして、人文知コミュニケーターと大学院生の交流会を実施することにより、大学院生がプレッシャーのないままに自分の研究を紹介し、異分野からの視点やアドバイスを伺う機会を提供しました。

今後の研究・活動の展望について

私はプラグマティックな人なので、研究は人の役に立たなければならぬと思います。そのため、私にとって「なぜか」と「その結果で」とは研究上で最も大事なポイントになります。私は研究成果を活かした人文知コミュニケーターの活動によって人を取り巻く社会現象がなぜ起きているか、そしてその社会現象はどのような結果をもたらしているかということを伝えていきたいと思っています。そうすることで、人々のお互いの理解を深め、より良い社会環境が実現できると考えています。



▲日文研でのワークショップに参加



▲歴博内の研究会での発表



▲人文知コミュニケーターと大学院生の交流会



▲英国ダラム大学からの訪問団、歴博館長の通訳

専門分野、現在の研究テーマについて

15～17世紀にかけての説話、物語草子、語り物芸能について研究を行っています。また、学生時代から民間信仰や在地伝承といった、地域に根差した文化にも関心をもっています。地元の伝承にちなむお菓子や、寺社の絵入りのお札を集めています。著書に『中近世語り物文芸の研究—信仰・絵画・地域伝承—』（三弥井書店、2023年）など。

これまでの主な活動とその成果

- ①展示室でのギャラリートーク（毎週木曜不定期開催）
- ②立川市西砂図書館主催の和本づくりワークショップでの絵巻作りの講師（2019年7月21日）
- ③企画展示「本のかたち 本のこころ」の企画・準備・図録編者（2019年10月15日～12月14日）
- ④古典の森モニターツアーにおけるギャラリートークおよび和本づくりワークショップの講師（2019年11月23日・30日）
- ⑤令和元年度くずし字講座の講師（2020年2月20日）
- ⑥オンラインイベント「国文学研究資料館×日本科学未来館 和書からさぐる！お江戸のサイエンスとライブラリー」ゲストスピーカー（2020年8月9日）
- ⑦企画展示「戦国武将たちの愛した文学～幸若舞曲～」の企画・準備（2020年11月4日～12月25日）
- ⑧日本古典籍講習会「講義2 くずし字について」講師（2021年7月6日の第19回、2022年7月12日の第20回を担当）
- ⑨企画展示「国文研ってどんなところ？～多摩地域ゆかりの所蔵品とともに～」企画・準備（多摩信用金庫地域貢献スペースにて開催、2021年10月4日～2022年1月6日）
- ⑩第2回人文知コミュニケーターLive!「女院と小栗判官のおはなし—人文知コミュニケーターと熊野を旅しよう！」（河合佐知子、光平有希研究員とともに、2021年10月24日）
- ⑪特別展示「創立50周年記念展示 こくぶんけん〈推し〉の一冊」企画・準備・図録編者（2022年5月13日～8月31日）
- ⑫東アジア図書館協議会日本資料委員会（Committee on Japanese Materials）くずし字講座の講師（2022年6月3日）
- ⑬第8回文献資料ワークショップ「絵巻」講師（2023年1月13日）

研究者として得た経験

我々研究者が面白いと感じていることと、一般社会の人たちが学問の世界に抱く興味関心は、異なります。そこに気づくことは、自分の視野の狭さや、物事の捉え方を改善する第一であり、研究者としての成長につながるのだと、人文知コミュニケーターの活動を通して学びました。

今後の研究・活動の展望について

- ・富山市立図書館山田孝雄セミナーにおける和本ワークショップ（仮）（2023年10月下旬開催予定）
- ・たましん美術館との連携展示（仮）（2024年度開催予定）

桑 汐 里
Kume Shiori

〈国文学研究資料館〉



▲ギャラリートークの様子（①）



▲企画・編集した展示図録（③⑪）



▲絵巻の扱い方について解説（⑬）

岩崎 拓也 Iwasaki Takuya

〈国立国語研究所〉



▲第4期プロジェクト HP



▲日本語教育関連 HP「にほんごでつながる」



▲YouTube 企画「ぶらっと国語研」



▲職業発見プログラムでの講演

専門分野、現在の研究テーマについて

日本語学、日本語教育学、計量国語学が専門です。句読点や括弧といった日本語の表記について興味があり、研究しています。

句読点や括弧は使い方一つで読みやすくも読みにくくなります。読点「、」と句点「。」は日本語を書くさいに必ずと言っていいほど使う符号ですが、実は、その使用規則は明確には定まっていません。また、括弧と句点の組み合わせ方などは、学校で習った使い方と社会一般での使われ方とでは全く違うというおもしろい現象が見られます。

最近では、句読点や括弧以外の符号にも着目しており、さまざまな符号を通じて「見やすい日本語」とはなにかを考えています。ビジネス文書の書き方や日本語教育の現場への提言を目指しています。

これまでの主な活動とその成果

新型コロナウイルスの流行により、オンラインでの活動を中心としていました。例えば、国語研の第4期プロジェクトホームページや Twitter アカウント、日本語教育関連ホームページ「にほんごでつながる」をそれぞれ作成し、公開したことが挙げられます。

また、国語研 YouTube では、夏に行われるイベント「ニホンゴ探検」の「ことばのミニ講義」を担当したり、研究者の紹介企画「ぶらっと国語研」の撮影・公開を行いました。最近では、対面形式でも活動を増やしており、中高生に対して国語研がどのような研究をしているのかといった訪問対応や、研究者がどういうことをしているのかといった職業発見プログラムでの講演も行いました。

このように、国語研の研究情報や成果をわかりやすく発信したり、国語研の研究者について知ってもらったりする活動に注力しました。

研究者として得た経験

私の研究は、テキストデータと向かい合うことが多く、実際に外に出たりして対話するということは少ないです。ですが、インターネットの向こう側にいる人のことを考えたり、実際に訪問対応や講演することを通じて、人との対話の重要性や、どのように話をするかわかりやすく相手に伝わるのかということ学ぶことができました。また、他の機関に所属する人文知コミュニケーターとの対話も自身の成長につながったのではないかと思います。

今後の研究・活動の展望について

自身の研究である句読点研究についてのデータベースの構築と拡張や、日本語母語話者だけでなく日本語学習者を含めた日本語使用者に対して、わかりやすい句読点の打ち方や、句読点を通じた文章理解法といった研究を行いたいと考えています。また、これらの研究を通じて、日本語の句読点研究や表記研究をもっと盛り上げていきたいと考えています。

専門分野、現在の研究テーマについて

私の専門分野は、中世日本の宗教文芸となります。現在は、「宗教者の実践活動の意義と影響」、「寺院空間にあらわれる教学と信仰のあり方」、「宗教言説の成立と展開」の3つを軸に、宗教文芸および思想史の立場から、院政期の顕密仏教についての研究を進めています。

これまでの主な活動とその成果

- ①[人コミュ通信 vol.20] 近代日中美術交渉の歴史を紐解く
—戦後先生にお話をうかがってきました— (2023年2月15日)

<https://www.nichibun.ac.jp/ja/topics/news/2023/02/15/s001/>



- ②日文研報道関係者懇話会：対談「西洋における家康のイメージ」(2023年3月8日)

<https://www.youtube.com/watch?v=VfYnyu4591M>



- ③日文研ワークショップ「次世代の国際日本研究」(2023年3月23日)

<https://www.nichibun.ac.jp/ja/topics/news/2023/03/31/s001/>



研究者として得た経験

人文知コミュニケーターとなる前は、専門分野と関連する領域以外の研究者と交流する機会は殆どありませんでしたが、人文知コミュニケーターとなってから、人文学の諸分野の研究にとどまらず、自然科学や社会科学などの研究者との対話も実現できました。他分野の研究者と交流することによって、より効果的なコミュニケーション能力がトレーニングされたとともに、自らの研究に関する新たな知見を得ることができました。また、研究の世界とは異なり、一般社会そのものを対象にして人文学の魅力を伝える機会をたくさん得たことは、研究者にとってはとても有り難いことだと思いました。こうした経験によって、研究者として社会と双方向的なコミュニケーションを達成し、新たな研究課題を見出すよい契機となり、更に人文学の研究成果を有効的に社会へと還元することの重要さもしっかり理解することができました。

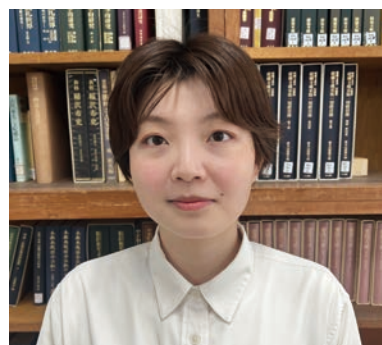
今後の研究・活動の展望について

今後の研究においては、中世日本の宗教儀礼と寺院空間に焦点を当てつつ、寺院聖教における学僧たちのネットワークの構築と展開にも注目したいと思います。また、そのネットワークの実態を究明するとともに、中世真言寺院の聖教データベースの整備にも力を注ぎたいと考えています。

今後の人文学における研究発信活動をより効果的に推進するため、若手研究者や大学院生を対象とするワークショップを積極的に行い、次世代の人文学研究の在り方とその方向性を模索していくことも考えています。

郭 佳 寧
Guo Jianing

〈国際日本文化研究センター〉



▲[人コミュ通信 vol.20] インタビューの様子



▲ YouTube 配信
「西洋における家康のイメージ」



▲ワークショップ「次世代の国際日本研究」の様子

金 セツピョル Kim Satbyul

〈総合地球環境学研究所〉



専門分野、現在の研究テーマについて

文化人類学、その中でも葬送儀礼研究と映像人類学を専門としています。葬儀研究は、現代の人々がいかに関死に向き合っているかを、葬式と墓の現状から読み解くものです。私は、逆説的ですが、墓を設けないという人たちについて、日本と韓国を舞台に研究してきました。一見、個人的な選択に見えるこのような現象を、近代以降の社会文化的背景との関連で究明しようとしています。

また、現地調査の一環として映像を撮影し、それに対する反応を分析する映像人類学的調査に取り組んでいます。研究成果も、論文だけでなく映像人類学作品として発信しています。

これまでの主な活動とその成果

映像を媒介として、研究と現地社会、市民、他分野を結ぶ活動をしてきました。例えば、ブータン王国で映像を撮影し、映像に対する現地の人々の解釈を研究に取り入れることで、双方向の研究を実現しようとしています（2017年度～2018年度）。その成果は、映像人類学作品として編集しました。また上映会を開き、市民からの意見も集めてきました（2017年度～2018年度）。また、葬いについて研究している研究者や、葬いを連想させる作品制作をしているアーティストをお招きし、研究や創作、発信の意義や方法に関する議論を交わし、その成果を書籍（金セツピョル、地主麻衣子 2021『葬いとカメラ』左右社）として刊行しました。さらに、アーティストとの協働の経験を活かし、奈良県立大学のアートプロジェクトに講師として携わりました。

研究者として得た経験

研究を多方面に拡張していく試みを通して、研究を社会に還元することは、責務であるだけでなく、研究成果を社会の文脈に位置づけ直す作業であり、そこから学ぶことがたくさんあることに気づかされました。

また、若手研究者にとっては、共同研究や、大きなイベントを主催する機会は多くありません。人文知コミュニケーター活動を通して、そういった機会に恵まれました。専門分野における評価に直結するものではありませんが、研究者として少しは成長できたと思います。

今後の研究・活動の展望について

近年の韓国の葬送儀礼研究では、その変化の速さが注目されてきました。しかし「墓を設けない」選択を掘り下げてみると、伝統を持続させようとする文脈が読み取られます。日本とは対照的と言えるこのような傾向を近代化との関連で研究していきたいと考えています。また、これまで行ってきた人文知コミュニケーターとしての活動を整理し、学術的に位置付ける作業にも取り組んでいくつもりです。



▲日本科学未来館での映像上映 & トークイベント



▲研究者とアーティストによる「葬い」映像研究合宿



▲奈良県立大学アートプロジェクト CHISOU での講師活動
写真提供：奈良県立大学「実践型アートマネジメント人材育成プログラム CHISOU」
撮影：小川美陽

専門分野、現在の研究テーマについて

民族音楽学・民俗芸能研究をしています。これまで、韓国の伝統的な打楽器芸能「農楽」の近代における公演芸能化、地方巡業などについて研究してきました。韓国にはかつて、家々を廻って芸能を演じることで生計を立てる多種多様な専門芸能者たちがいました。しかし近代化に伴ってそのような芸能者の旅は見られなくなりました。一方で、日本には現在も西日本各地の家々で厄祓いの獅子舞を演じている「伊勢大神楽」がいます。2016年以降は、日韓の旅する専門芸能者の違いや共通性を探る比較研究を目指し、調査・研究を行ってきました。

これまでの主な活動とその成果

日韓の民俗芸能の魅力を伝えるため、これまで公演の企画や、映像制作を行ってきました。2019年には国立民族学博物館に山本源太夫社中を招いてワークショップ「みんなく村に神楽がやってくる！伊勢大神楽実演とおはなし」を行いました。2020～2022年のコロナ禍では、映像民族誌「それでも獅子は旅を続ける～山本源太夫社中 伊勢大神楽日誌」を制作し、東京ドキュメンタリー映画祭のほか、各地で上映されました。2021年には、外に出かける機会の少ない子どもたちに向けてオンラインワークショップ「ドンドン・クンタクン！ダンボール太鼓で韓国のリズムを叩こう」を実施し、好評を得ました。

研究者として得た経験

みんなくの人文知コミュニケーターとしては、「社会連携」を担当してきました。2023年2月には大阪府松原市民松原図書館と連携し、子どもを対象とした韓国伝統文化の教育普及プログラムを企画・実施しました。一般市民に向けて私の研究成果を発信することはもちろん重要ですが、みんなくが持っている様々なリソース（標本資料、教育用貸出資料、研究者の人材や知識）と、図書館が持つ地域のネットワークや、児童図書に関する知識・経験を最大限活用することが目標であり、そのために頭をひねりました。ここで得たスキルや問題意識は、今後社会と大学等の高等教育・研究機関をつなぐ上で大いに役に立つと期待されます。

今後の研究・活動の展望について

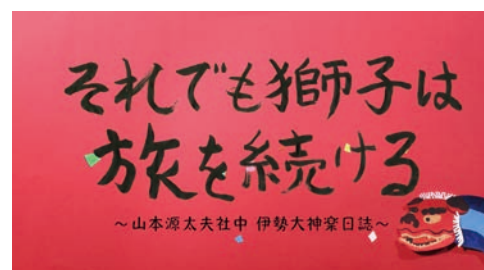
コロナ禍の3年間で日韓ともに地域の祭礼行事が停滞していましたが、ようやく復帰の兆しが見えてきたので、フィールドワークや国際交流の機会をさらに積極的に作っていきたいと考えています。これまでの専門芸能者を対象とした研究に加え、今後は韓国南部の島しょ地域で重点的なフィールドワークを行っていきたいと考えています。地域の生業やくらしの民俗とともに祭りや芸能を理解する経験を積みたいためです。また、日本の伊勢大神楽研究についても、これまで行ってきた多数の調査を報告書にまとめて発刊したいと考えています。

神野 知恵
Kamino Chie

〈国立民族学博物館〉



▲ワークショップ「みんなく村に神楽がやってくる！」（2019年、国立民族学博物館）



▲映像民族誌「それでも獅子は旅を続ける～山本源太夫社中 伊勢大神楽日誌」（2022年、国立民族学博物館）



▲大阪府松原市民松原図書館との連携イベントでの段ボール太鼓ワークショップ（2023年、松原テラス（輝））

人文知コミュニケーション経験者へのインタビュー

大石 侑香 Oishi Yuka

〈元：国立民族学博物館 人文知コミュニケーション〉
国立大学法人神戸大学大学院国際文化学研究所 講師



Q. 人文知コミュニケーションを目指したきっかけ

私は当初、人文知コミュニケーションの役割は自然科学をはじめとする他の分野の人達に対するコミュニケーションだと思っていたため、異分野との共同研究に対する興味から人文知コミュニケーションに志願しました。

Q. 人文知コミュニケーションになる前と後での 人文知コミュニケーションに対するイメージの変化

大人向けのものかと思いましたが、民博だとわりと子供対象のイベントを担当することが多かったです。そのため子供が分かるように考えないといけないのが技術的に難しかったです。また、人文知コミュニケーションを教育や生涯学習との違いについて考えながら実践していました。

また、学術と社会との双方向のコミュニケーションが理想でしたが、何か投げればすぐに返ってくるようなものでなくて、タイムラグがあるというか、数十年の長い活動期間を経てようやく可能になるのではないかと思います。数年で研究に対し社会から何か反応がもらえると期待しないようになりました。個々人が日々学び蓄積する知と新しい人文知と社会と生活とが、それぞれの中で結びつくには時間がかかると思います。

光平 有希 Mitsuhiro Yuki

〈元：国際日本文化研究センター 人文知コミュニケーション〉
京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 特別研究員



Q. 人文知コミュニケーションを目指したきっかけ

わたしは「音楽療法史研究」という医学史や音楽史など複数の領域をまたぐ学際的な研究分野を専門としています。国内外でまだ俯瞰的な研究が行われていない分野でもあり、論文執筆や学会発表と並行して、異分野研究者とのシンポジウム開催や公開講座などを通じて模索する——そうした活動を国際日本文化研究センター（以下「日文研」）の機関研究員時から積極的に取り組みました。同時期には、所属しているプロジェクトの研究や業務を通じて日文研所蔵の医療文化史料や日本関係欧文史料（西洋の人が日本をテーマにかいた図書や地図など）に触れる機会も多くあり、各資料の情報や研究成果を効果的にデータベースやウェブサイトが発信していくことの検討機会にも恵まれました。そうした時、日文研でも人文知コミュニケーションの公募が出ることを知りました。双方向コミュニケーションを通して異分野や社会と繋がるという点は、自身がこれまでに取り組んできた活動とも密接していますし、日文研所蔵資料をさらに効果的かつ柔軟に発信するツールや方法を学び実践に繋げることができれば、それはすぐやり甲斐がある仕事だと考え、応募してみたと思いました。

Q. 人文知コミュニケーションになる前と後での 人文知コミュニケーションに対するイメージの変化

3年間の活動を通じて「人文知コミュニケーション」が取り組むこと、そしてそのコミュニケーションの具体的な方法や定義は各

Q. 2年間の活動を通して社会や研究との向き合い方の変化

研究ですと、同じ内容で2度発表することはありませんが、コミュニケーションは何度も同じことを話すことが求められます。最初はそれがまるで二重投稿しているように感じて、違和感がありました。しかし、活動をしていくうちに、広く社会とコミュニケーションするには、何度も同じことを繰り返さないといけないということが分かりました。一人でできる回数には限度があります。社会とのコミュニケーションには「効率」も考えねばならないと学びました。



▲日本科学未来館とのイベント「変わりゆく北極について考えるボードゲーム『The Arctic』体験会」

人が今もって模索中であり、確立されたものではないことを痛感しました。理系分野のように発信によるフィードバックが直接的であったり短期的ではなく、人文学分野のコミュニケーションはもっと長期的な広がりをもった視野が必要となりますが、その受容先や必要としている人たち、機関は多分にあるということもよく分かりました。3年間に取り組んでいた小さな幾つかの事例を振り返ってみると、研究機関の中からパブリック・ヒューマニティーズを検討することの意味を考える時間にもなり、活動期間中は人文知コミュニケーションの意義を実感する日々でした。



▲日文研所蔵医療文化史料（宗田文庫）を紹介している様子（京都アカデミックブリッジにて）

Q. 2年間の活動を通して社会や研究との向き合い方の変化

双方向コミュニケーションはとても難しく、とりわけ社会や異分野研究者たちからのフィードバックを研究深化にどこまで結びつけられるのかというところで試行錯誤を繰り返しました。また、アウトプットは実際どのように完結されるのか。目に見えないことのもどかしさや、そういった人文知コミュニケーションの定型がないということに悩みつ、それでも手探りの過程に魅力ややり甲斐を感じました。これからさらに人文知コミュニケーション、そして人文知コミュニケーション自体の需要や必要性が広がっていくのではないのでしょうか。そのコミュニケーションを長い時間をかけて継続的に行うことで、生活や文化、生き方といったところにより人文学の知というものが届けられる——そうした人文学という学問領域のひとつの形にも寄与できるよう、わたし自身もこれからの研究生生活の中で継続的かつ地道に活動を展開していこうと考えています。



人文知 コミュニケーター 養成事業の展開

人間文化研究機構
人間文化研究創発センター 特任助教

大場 豪
Ohba Go

人文知コミュニケーション研究会の定期開催

全国の6機関に配置された人文知コミュニケーター間の連携と情報共有を図るため、2020年度に始まった人文知コミュニケーション研究会を月に1回オンラインにて開催しています。2022年度にはオンラインと対面によるハイブリッド式の研究会も開催することで、各コミュニケーターが実践する人文知コミュニケーションの事例についての意見交換を通して相互理解にも繋げています。

人文知コミュニケーターの資質向上プログラム

人文知コミュニケーターは、①情報収集・分析力、②伝達力・活用力、③共創力のスキルが求められます。この3つのスキルを養うべく、人間文化研究機構では外部機関と連携しながら研修事業や連携イベント等を企画・運営しており、その1つが印刷博物館での研修です。2022年度の研修では、ブランディングや地域連携事業の紹介といった講義以外にも、印刷博物館での展示見学やデジタルアーカイブといった体験型の学習や、各講師との意見交換などを実施しました。こうした研修先で得た情報や知識、人的ネットワークは、各人文知コミュニケーターの今後の活動の糧となることが求められます。

筑波大学大学院連携講座

筑波大学・国立科学博物館と連携した授業科目「人文知コミュニケーション：人文社会科学と自然科学の壁を超える」では、人文知コミュニケーターが実際に教壇に立っています。人文知コミュニケーターとしての活動を紹介するだけでなく、活動や研究会を通して得たさまざまな視座や学術的知見を大学院生に伝えています。本科目を通して未来の研究者の卵たちに、学術分野にかかわらず、いかに人文知コミュニケーションの実践が困難であり、かつ必要不可欠であるかを経験的に学ぶ機会を提供しています。

研究者・教育者としての活躍

自身の研究に邁進するだけでなく、常に研究者としての自らを社会のなかに位置づけ、社会との双方向コミュニケーションのスキルを身につけた人文知コミュニケーターは、新しいタイプの研究者であり教育者であるといえます。これまで機構で採用された計10名の人文知コミュニケーターのうち4名が大学の教職員として活躍していることから、今後も各地に人文知コミュニケーションの裾野の広がりが期待されます。

